

図書教材の内容分析（その1）

—小学校国語科の図書教材中心に—

岡本 奎六

1、研究のねらいと方法

(1) 研究のねらい

この研究のねらいは、図書教材の内容を分析し、その教育課程的な妥当性を主として明らかにすることにある。

ここでいう「図書教材」とは、つぎのような特質を持つ教材のことである。

1) それは、教室で授業中に用いたり、家庭学習の際に活用したりする教材（ないしは自己学習材）である。

2) それは、各教科書会社発行の各学年の教科書に即して作られたものであり、その教科書の適用される学年の「教育目標」や「指導事項」の達成に役立つことをねらいとした教材である。

3) それは、大別すればつぎの三つのうちのいずれかに分類することができる。

イ) 学習内容の理解と習得に役立つ「ワーク教材、ないしは習得教材」

ロ) 反復練習と学習内容の習熟と定着とに役立つ「ドリル教材、ないしは習熟教材」

ハ) 学習内容の習得度・習熟度のテストと指導調整に役立つ「テスト教材、ないしは評価教材」

本稿では、図書教材を以上のように規定した。（この規定は筆者の主観的な規定ではあるが、ほぼ一般的にも認められる規定であろう。なおこの規定によると、辞書・事典の類や、発展的学習に用いられる児童文学書や科学的読みものは、図書教材には含まれなくなる。これらの図書も、図書教材を広狭二義に分けた場合、広義の図書教材には含めることができよう。）

(2) 研究の方法

先ず分析を行なった図書教材は、（表1）に示す三種類のもので、いずれも表に示す6社から出版されたものである。表に示すように、二種類はドリル教

表1 分析された国語科図書教材

出版社	習熟教材	評価教材
青葉出版	国語ドリル くり返し漢字ドリル	国語観点別評価
教育同人	国語ドリル くり返し漢字ドリル	国語観点別評価
光文書院	国語ドリル くり返し漢字ドリル	国語観点別評価
新学社	国語ドリル くり返し漢字ドリル	国語観点別評価
日本標準	国語ドリル くり返し漢字ドリル	国語観点別評価
文溪堂	国語ドリル くり返し漢字ドリル	国語観点別評価

材（習熟教材）で、他の一種類はテスト教材（評価教材）である。なお、ドリル教材の「くり返しドリル」は、小学校4年生用と2年生用のものを分析の対象とした。しかし「国語ドリル」と「国語観点別評価」の二種類は、小学校6年生用のものを分析の対象とした。

内容分析に当っては、同じ種類の図書教材の問題は、同じ内容分類枠組を用いて分類した。たとえば「国語ドリル」についていえば、（表2）の分類枠組を用いた。この表について、つぎに少し説明を加えることにする。

表に見られるように、国語ドリルの問題は、1) 文字（の読み書き）、2) 言葉（の意味、決まりと使い方）、それに3) 文・文章（の構成と文意の理解）に分かれ、それらはさらに第二段階で細分化がなされる。第二段階の細分化された問題は、表に見られるような内容・形式をとっている。これらの内容・形式について、補足の説明をすると、つぎのようである。

（1）文字の「1・漢字の読み」から、「4・漢字の書き順」までこれらの問題は意味に関係なく、文字の読み書きの問題である。「4・漢字の書き順」だけはドリル問題の形式をとらず、ただ正しい漢字の書き順を示し、解説を加えているだけである。

表2 「国語ドリル」の問題の分類枠組

	分類	内容と構成
(1) 文字 (読み書き)	1.漢字の読み 2.漢字の書き 3.かなづかい 4.漢字の書き順	読みがなを振る 漢字の書き取り(用言には送りがなも振る) 正しいかなづかいを選ぶ 正しい書き順を示す
(2) 言葉 (意味、決まりと使い方)	1.言葉の意味・反対語 2.季語と季節、俳句の決まり 3.熟語の構成分析 4.熟語の分類 5.熟語誤りの訂正 6.修飾部・被修飾部 7.慣用句の使い方 8.助詞の使い方 9.類義語の使い方 10.係りと受け 11.比喩と擬人法 12.時制、活用誤り	正しい意味を選ぶ 季語の指摘と季節の理解等 熟語作り、熟語の分解 熟語を型別に分ける 誤用漢字を入れ換える 修飾部・被修飾部の指摘 慣用句の組み合わせ、選択 正しい助詞の選択、充填 正しい使い方、正しい使い分け 正しい係り～受けの選択 比喩、擬人法表現の指摘 時制や活用の誤り訂正
(3) 文 文章 (構成と意味理解)	1.倒置文の変換 2.常態～敬能の変換 3.能動～受動の変換 4.つなぎ言葉 5.こそあど言葉 6.事実～意見の文 7.主語と述語 8.短歌俳句の読み 9.短歌俳句の構成 10.説明文の読み 11.物語文の読み 12.文中の言語事項	正常の文に変換 両者間の文型変換をする 両者間の文型変換をする 接続語を空欄に充填 被指示語の指摘 事実の文と意見の文の見分け 文の主語と述語の見分け 文意の理解、心情の理解 上の句、下の句を組み合わせる 要旨、因果関係、重要な細部 場面、心情の読み取り 文中の言語事項の理解

(2) 言葉の「1、言葉の意味」 これは選択法形式の問題で、正しい意味を選択肢の中から選択する。

「2、季語と季節」 これは與えられた俳句の中の季語を指摘したり、それは春夏秋冬のいずれの季節を示すか指摘する問題である。

「4、熟語の分類」 例えば「上下、左右(対照的な語の結合)」、「類似、町村」(類似な語の結合)というような分類視点もあれば、「大失敗、高学年」(一字と二字の結合)、「開会式、救急車」(二字と一字の結合)というような視点からの分類もある。

「7、慣用句の使い方」 これは慣用句をそれぞれ二分したものを與え、正しい組み合わせを行わせる。あるいは慣用句の下半分を選択肢にして正答を選ばせる。

「12、時制、活用誤り」 これは動詞の時制や形容詞の活用形などに誤りのある文を與え、誤りを訂正させる。

(3) 文・文章の「1、倒置文の変換」 これは倒置文を與え、正常な文型に変換させる。あるいはその中の主語や述語を指摘させる。

「5、つなぎ言葉」 これは二つの文をつなぐ適切な接続語を空欄に充填させる。

「9、短歌・俳句の読み」 短歌・俳句を解釈させたり、選択肢の中から正しい場面状況や心情などを選択させる。

以上は、「国語ドリル」の問題の分類枠組についての説明である。国語ドリル以外の図書教材の分類枠組やその説明は、それぞれの図書教材の内容分析の章で述べ、ここでは割愛する。

つぎに、本稿で分析した図書教材は、どんな教科書に即して作られているか。その点について触れることにする。本稿で分析した図書教材は、いずれも「光村図書出版」の国語教科書に即している。「国語ドリル」(6年生用)について言えば、光村図書出版の国語教科書6年生用上巻に即して作られている。

ただし、分析した国語ドリルは一学期用のものであるから、上巻の中の一学期に履修する予定の単元に即して作られている。上巻のすべての単元を対象としているわけではない。

表3 光村の教科書中の分析の対象となった単元名（教科書の目次による）

六年国語教科書上巻	<ol style="list-style-type: none"> 1.本を開こう〔物語〕 「赤い実のはじけた」 〈作文ノート〉 2.短歌・俳句を読もう 「短歌と俳句」 〈言葉の使い方〉 3.考えを深めて〔作文〕 「楽しい学校生活」 〈漢字三字以上の熟語の成り立ち〉 4.文学の要点をとらえて〔説明文〕 「太陽のめぐみ／オゾンがこわれる」 〈朗読の工夫〉 5.作品の主題を考えて〔物語〕 「石うすの歌」 〈解説者になって〉 6.本に親しむ〔読書〕 「風の強い日」
四年国語教科書上巻	<ol style="list-style-type: none"> 1.本を開こう〔物語〕 「ガオーッ」 〈作文ノート〉 2.詩を読もう 「春の歌／尾久島の杉の木」 〈音読の工夫〉 3.メモを生かして〔作文〕 「しょうきゃく工場の見学」 〈こそあど言葉〉 4.段落に気をつけて〔説明文〕 「カブトガニを守る／キョウリュウをさぐる」 〈分かりやすく話すには〉 5.様子や気持ちに気をつけて〔物語〕 「白いぼうし」 〈漢字の音と訓〉 6.本は友だち〔読書〕 「吉四六話」

(表3)は、光村の6年生用および4年生用教科書の上巻中の、対象となった単元名を示す。両教科書の単元構成は、ほぼ同じである。先ず単元1については、両教科書とも物語の読解をめざした読解単元である。その他にこの単元の中に、作文の仕方に関係する「作文ノート」がある。

単元2は詩歌の読解単元という点は共通で、他に6年生用は言語事項、4年生用は音読となっている。

単元3は子どもの作品による作文単元という点は共通で、他に6年生用も4年生用も共通に言語事項を扱っている。

単元4は説明文の読解単元という点は共通であり、他に6年生用は朗法を、4年生用は話し方を扱っている。

単元5は物語の読解単元と言語事項を共通に扱っている。他に、表3では「6」として単元5から区別しているが、この単元5の中で物語に親しむための「6の読書」を扱っている。

以上のように、6年生用の教科書も4年生用の教科書も、大雑把に云えば内容領域(単元構成)がほぼ似ている。学年により、中心となる作文スキルや読書スキル等(具体的な言語事項)は相違しているが、それは当然である。

2、「くり返し漢字ドリル」の内容分析

「くり返し漢字ドリル」は、どのような内容のものであるか。(表4)は、ドリル問題を分類し、その内容と形式とを示したものである。この表によると、ドリル問題の1は「漢字の読み」で、それは漢字語句に読みがなを振るという内容・形式のものである。この表には、他のそれぞれのドリル問題についても、その内容と形式とが説明してある。

この(表4)の13のドリル問題に、6社の図書教材はそれぞれ何頁割り当てているかを調べたのが、(表5・1)(表5・2)の「くり返し漢字ドリルの内容分析表」である。この表によると、つぎのことが分かる。

先ず第一に、ドリル問題の「1、漢字の読み」、「2、漢字の書き」および「3、新出漢字」には、各社とも極めて多くの頁を割り当てている。ことに表の合計欄を見ると、このドリル問題1から3までに、圧倒的に多くの頁が割り

表4 漢字ドリル問題の分類枠組

ドリル問題	問題内容と形式
1. 漢字の読み	漢字語句に読みがなを振る
2. 漢字の書き (送りがな)	ふりがな部分を漢字に直す。用言には送りがなも付ける
3. 新出漢字	新出漢字の読み書き、意味、用例、書き順、画数等を示す
4. 漢字の読みかえ	既習漢字の読みと新しい読みかえを示す(音読み、訓読み)
5. 書き間違え易い字	書き間違え易い漢字の練習
6. 類似な部首の字	(例) 勞と堂、創と飼を示す
7. 漢字の画	指定の漢字部分は何画目か当てる
8. 漢字の特別な読み	(例) 「口調、今朝」の読み
9. 同音意義語	(例) 「写すと映す」の区別
10. 熟語造り	與えられた漢字で熟語を造る
11. 漢字の使い誤り	(例) 川の返り→辺り
12. 語の意味、反対語	語の意味や反対語の選択
13. 漢字クイズ	複数の漢字の部首を組合わせて別の漢字を造る

当てられていることがわかる。具体的な数字を挙げると、(表5・1)の「1、漢字の読み」(読みがな振りのドリル問題)には、6社合計で60頁も全頁を割り当て、さらに20頁も部分頁を割り当てている。「2、漢字の書き」(漢字書き取りのドリル問題)には、全頁は71頁、部分頁はさらに23頁割り当てている。「3、新出漢字」にも、全頁は60頁、部分頁は29頁割り当てている。

ここで注意すべきことは、漢字の読み書きは単独で提示された漢字の読み書きではなく、漢字語句、ないし短文という自然な形で提示された漢字の読み書きを練習するということである。さらに「3、新出漢字」については、その読み書きだけでなく、語句としての用法例、書き順、画数等まで、これらがよく分かるように提示されている。漢字ドリルの図書教材としての内容的妥当性を

表5・2 「くり返し漢字ドリル」の内容分析（2年生用図書教材）

ドリル問題	A社		B社		C社		D社		E社		F社		合計	
	全頁	部分	全頁	部分	全頁	部分	全頁	部分	全頁	部分	全頁	部分	全頁	部分
1.漢字の読み	07	01	07	00	05	01	06	01	06	02	05	01	36	06
2.漢字の書き	08	02	07	02	08	02	09	01	09	02	08	01	49	10
3.新出漢字	07	06	07	06	08	05	08	04	08	05	08	07	46	33
4.読みかえ漢字	00	04	00	04	00	05	00	05	00	01	00	04	00	23
5.書き違い易い漢字	00	03	00	07	00	04	00	00	00	03	00	05	00	22
6.類似部首漢字	00	01	00	00	00	02	00	02	00	02	00	01	00	08
7.漢字の画	00	00	00	00	00	00	00	01	00	00	00	00	00	01
8.特別読みの漢字	00	01	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	01
9.同音意義語	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00
10.熟語造り	00	00	00	00	00	01	00	00	00	00	00	01	00	02
11.使い誤り訂正	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	01	00	01
12.語の意味・反対語	00	00	00	02	00	00	00	01	00	01	00	01	00	05
13.漢字クイズ	00	00	00	02	00	02	00	00	00	00	00	00	00	04

第三に、割り当て頁数は必ずしも多くないが、つぎのドリル問題にも注目すべき点がある。先ず、「飲と創、典と曲」というように部首や漢字部分に類似性のある漢字を示し、その異同に注意を喚起しているのが、「6、類似部首漢字」である。割り当てている頁数は少ないが、6社中5社の漢字ドリルが、2年生用教材ではこのドリル問題を取り上げている。4年生用教材では、どの社もこの問題を取り上げている。

ついで4年生用教材では、「口調、今朝」と云ったような、「8、特別な読みの漢字」、「写すー映す」のような同音だが意味、用法は異なる「9、同音異義語」にも多くの社が目をつけ、部分頁を割り当てている。これらも、子どもの注意を喚起する必要がある大事な漢字ドリルの問題といえよう。

この他6社中3社が部分頁を割り当てているのが、「11、漢字の使い誤りの訂正」をする問題と、「10、漢字の熟語作りの問題」であり、これらも漢字ドリルの問題としては興味深い。「13、漢字クイズ」はB社しか取り上げていないが、これは漢字学習の興味付けという意味で、よい問題である。

2年生用の「くり返し漢字ドリル」も、これまで述べてきた4年生用のものとほぼ同じ内容である。ただ4年生用の問題に比べると、問題の種類がやや少なく、多様性に欠ける。2年生ではまだ、さまざまな形式の問題に馴染みにくいので、これはやむを得ないところもあるが、作問に一層工夫を凝らす余地も残されているように思われる。漢字クイズは2年生用の方が多く取り上げているが、こうした工夫は注目に値する。

以上は、「くり返し漢字ドリル」の内容分析のあらましである。漢字語句やこれを含む短文の形で問題を提示し、漢字の読み書きをごく自然な日常使われる形で練習し、自己評価もできるドリルブックになっている。まちがい易い点については、特別な解説も加えている。社によって問題は異なるが、一、二回はまとめて漢字の読み書きの力だめしをし、総括をする工夫も行なっている。

3、「国語ドリル」（6年生用）の内容分析

「国語ドリル」の問題を分類する枠組については、1章の（2）で述べた。

1章の（表2）は、この分類枠組を表示したものである。

この（表2）の分類枠組を用いて、6社の「国語ドリル」（6年生用）の内容分析を行ったのが、つぎに示す（表6）である。

この（表6）に見られるように、国語ドリルの練習問題は、「（1）文字（の読み書き）」が4種類、「（2）言葉（の意味、決まりと使い方）」が13種類、そして「（3）文・文章（の構成と文意理解）」が12種類となっている。つまり三領域合わせると、29種類の問題に分かれている。

（表6）の行列の中には、いずれも漢数字とアラビア数字とが記入されている。これらの数字は、いずれも「国語ドリル」のそれぞれの問題に割り当てられた頁数を示す。漢数字は、全頁割り当ての頁数を示し、他方のアラビア数字は部分頁の割り当てを示す。

たとえば、「1、漢字の読み」と「A社」との交わる行列には、漢数字の「一」とアラビア数字の「8」とが記されている。これは、A社の「国語ドリル」に於ては、「1、漢字の読み」の問題を、1頁だけ全頁割り当て、8頁だけ部分頁を割り当てていることを示す。同様にB社の「六」と「3」は、「1、漢字

表6 「国語ドリル」の内容分析

問題の分類		A社	B社	C社	D社	E社	F社	合計
(1) 文字 (読み書き)	1. 漢字の読み	一 8	六 3	〇 8	四 10	四 3	一 9	十六 41
	2. 漢字の書き (送りがなも含む)	三 15	〇 20	二 13	〇 18	五 8	〇 14	十 88
	3. かなづかい	〇 0	〇 0	〇 2	〇 1	〇 0	〇 0	〇 3
	4. 漢字の書き順	〇 0	〇 0	〇 6	〇 0	〇 0	〇 0	〇 6
(2) 言葉 (意味・決まりと使い方)	1. 言葉の意味・反対語	一 7	〇 4	〇 3	〇 6	一 6	〇 4	二 30
	2. 短歌俳句の決まり	〇 2	〇 1	〇 0	〇 1	〇 1	〇 0	〇 5
	3. 季語と季節	〇 3	〇 2	〇 0	〇 1	〇 1	〇 1	〇 8
	4. 熟語造りと分解	〇 4	〇 5	〇 2	〇 2	〇 7	〇 5	〇 25
	5. 熟語の分類	〇 2	〇 2	〇 0	〇 1	〇 1	〇 2	〇 8
	6. 熟語誤りの訂正	〇 0	〇 0	〇 2	〇 0	〇 0	〇 0	〇 2
	7. 修飾部・被修飾部	〇 3	一 2	〇 2	〇 1	〇 3	〇 7	一 18
	8. 慣用句の使い方	〇 3	〇 4	〇 1	〇 3	〇 4	〇 6	〇 21
	9. 助詞の使い方	〇 1	〇 2	〇 2	〇 1	〇 3	〇 3	〇 12
	10. 類義語の使い方	〇 2	〇 0	〇 0	〇 2	〇 1	〇 0	〇 5
	11. 係りと受け	〇 6	〇 2	〇 1	〇 1	〇 1	〇 1	〇 12
	12. 比喻と擬人法	〇 1	〇 0	〇 2	〇 2	〇 0	〇 0	〇 5
	13. 時制、活用誤り	〇 0	〇 0	〇 1	〇 0	〇 0	〇 0	〇 1
(3) 文・文章 (の構成と文意理解)	1. 倒置文の変換	〇 0	〇 0	一 0	〇 0	〇 0	〇 0	一 0
	2. 常態～敬能の変換	〇 5	〇 1	〇 2	〇 2	〇 1	〇 1	〇 12
	3. 能動～受動の変換	〇 3	〇 2	二 1	〇 0	〇 2	〇 2	二 10
	4. つなぎ言葉	〇 2	〇 2	〇 1	〇 2	〇 1	〇 5	〇 13
	5. こそあと言葉	〇 1	〇 2	〇 0	〇 0	〇 2	〇 1	〇 6
	6. 事実と意見の文	〇 1	〇 1	〇 0	〇 0	〇 0	〇 0	〇 2
	7. 主語と述語	〇 0	〇 2	〇 0	〇 1	〇 0	〇 2	〇 5
	8. 短歌俳句の読み	〇 0	〇 0	〇 0	〇 0	〇 4	〇 0	〇 4
	9. 短歌俳句の構成	〇 1	〇 0	〇 0	〇 0	〇 1	〇 0	〇 2
	10. 説明文の読み	〇 3	〇 4	〇 6	〇 4	〇 5	〇 0	〇 22
	11. 物語文の読み	〇 2	〇 1	〇 2	〇 2	〇 2	〇 0	〇 9
	12. 文中の言語事項	〇 7	〇 4	〇 5	〇 9	〇 9	〇 9	〇 43

の読み」の問題を、6頁も全頁割り当て、部分頁（頁の一部）は3頁だけ割り当てていることを示す。この（表6）から、つぎのことが分かる。

（1）文字の読み書き

「1、漢字の読み」から「4、漢字の書き順」までの4問題は、言葉の深層にある意味領域に関係のない、表層にある音声記号と文字記号に係る問題領域である。つまり発音法や表記法・正書法に係る問題領域である。「表現、理解、言語事項」という「国語科の学習指導要領」の分類でいえば、表現と理解の基礎にある言語事項の中に位置付けられる領域である。

（表6）によると、この文字の読み書きの領域は、各社とも多くの頁を割り当て、その習熟に力を入れていることがわかる。とくに「1、漢字の読み」と「2、漢字の書き」とに対しては、多くの頁を割り当てている。その小計欄をみると、前者には全頁を16頁、部分頁を41頁も割り当てている。後者の「2、漢字の書き」についても、全頁を10頁、部分頁に至っては88頁も割り当てている。これは他の問題領域に比べて著しく多い頁数の割り当てであって、漢字学習にいかん力を入れているかを示している。

漢字の読み書き問題は、作問が容易であるだけでなく、短時間に多数の問題を実施することができる。漢字学習の重要さの他に上記の理由で、国語ドリルの中での漢字学習の占める比重が高まるのであろう。漢字の読み書きは、学習すれば直ちにその学習効果が現われ、学習成績に反映される。この点からも、国語ドリルの中で占める漢字の読み書きの比重は、かけ過ぎと思われるほどかけられているのであろう。

なお、（2）文字の読み書き領域の中の「2、漢字の書き」のところでは、「こまる」は「困まる」、「困る」のいずれの送りがながよいかという、送りがな振りの問題が含まれている。同様に「1、漢字の読み」のところでは、「通る」は「とおる」、「とうる」のいずれがよいかという、かなづかいの問題が自ずから含まれる。しかし（2）文字の読み書きのところ「3、かなづかい」を別に設けたのは、かなづかいを重視し、別個にかなづかいの問題を設けた社があったからである。

「4、漢字の書き順」を取り上げた社も、表に1社だけ示されている。同社

は新出漢字に限って書き順を取り上げている。「漢字ドリル」と同様、誤り易い書き順の漢字については、「国語ドリル」に於ても取り上げることは適切であるといえよう。

(2) 言葉（の意味、決まりと使い方）

この領域には、(表6)に見られるように、「1、言葉の意味、反対語」から「13、時制、活用誤り」に至るまで、13種のドリル問題が含まれる。

これら13種の問題の中では、表の合計欄の数字を見ると、「1、言葉の意味、反対語」に最も多くの頁がさかれている。つまり2頁全頁を割り当て、さらに30頁部分頁を6社全体では割り当て、語句の意味理解やその反対語の再生能力のドリルに力を入れている。言葉の意味のドリルに力を入れる理由は、「言葉の意味理解が、文章表現と理解の基礎として大切だ」、という理由にもよる。他方では、漢字の読み書きのところで述べた理由もそのまま当てはまるであろう。つまり、作問も回答も容易でドリル問題に馴染み易い性質を持っていること、ドリルの効果が直ちに上がり、学習成績にすぐ反映してくることなどである。

つぎの「2、短歌・俳句の決まり」と「3、季語と季節」は、「短歌・俳句を読もう」という教科書単元に即して作られた問題である。割り当て頁数は多いとは云えないが、それでも各社ともこれらの問題に部分頁を割り当てている。これらの問題は、俳句・短歌に対する「知識・理解」の面を扱っている。これに対して、後述する「8、短歌・俳句の読み」、「10、短歌・俳句の構成」の問題は、短歌・俳句の読解や構成の「技能的な面」を扱っている。

第三に、「4、熟語作りとその分解」から「熟語誤りの訂正」までの3種の問題が一まとまりになっている。これらは熟語や複合語に関する主として「知識・理解」の問題であるが、児童にも興味のある言語事項と云えよう。(表6)によると、6社の合計では35頁も部分頁が、これらの問題に割り当てられている。熟語の問題も、国語ドリルの中で比較的重要視されていることが分かる。

第四に、「7、修飾部・被修飾部」から、「13、時制や活用」の7種の問題が一まとまりである。これらは「生きてはたらく文法的知識・技能の問題」と名付けることのできる問題である。読解の基礎的技能でもあるが、作文表現には欠くことのできない基礎技能と云うことができよう。

これら一まとまりの問題のうち、比較的多くの部分頁を割り当てられているのは、(表6)によると「7、修飾部・被修飾部」、「8、慣用句の使い方」である。修飾部に対応する被修飾の文の構成部分を捉えたり、慣用句を使いこなす知識・技能を持っているということは、大切な表現・理解の基礎技能と云うことができよう。

なお残りの5種類の問題も、表現・理解の基礎技能として、大切な問題のように思われる。(表6)によると、これらの問題の取り上げ方は各社まちまちであり、必ずしも各社ともこれらの問題をみな重視し、取り上げているわけではない。その意味でこれらの問題は、さらに検討して見る必要があるであろう。

(3) 文・文章(の構成と文意理解)

この領域のドリル問題のうち、「倒置文の変換」から「能動態～受動態の変換」までの三種の問題は、文の意味を変えることなく、文の型を変える問題である。倒置文を正常の文型に変えたり、能動態の文を受動態の文に変えるような問題である。(表6)によると、倒置文を変換する問題は、B社が全頁を1頁割り当てているだけであるが、他の二種の問題には、各社とも部分頁を割り当てている。この問題は変形文法の立場から作られており、作文表現の基礎的技術の向上に役立つよい問題と考えられる。

「4、つなぎ言葉」、「5、こそあど言葉」にも、ほぼ全部の社が部分頁を割り当て、これをかなり重視していることが、(表6)から伺うことができる。

主として文と文をつなぐ適切な接続語を空欄に充填するのが前者の問題である。したがってこの問題は、文と文の関係をはっきり示すような作文表現にも、文と文の関係をはっきり捉える読解にも大切な技能である。後者のこそあど言葉の問題も、前の文に述べられている事項等とこれを指示する語との関係をはっきりさせる問題であるから、作文にも読解にも大切な技能を扱っている。この意味で、これらの問題にかなりの頁を割り当てていることは、適切なことと思われる。

「6、事物の文と意見文」を見分けることは、意味論の立場からする興味深い問題である。「7、主語と述語」を指摘する問題も、主述の照応した文を書

いたり、複雑な文の構成を理解し、文意を正しく捉えるために必要で、それなりに有効な問題と云えよう。

「8、短歌・俳句の読み」と「9、短歌・俳句の構成」については、すでに軽く触れたことであるが、短歌・俳句作りやその文意理解に必要なドリル問題である。「10、説明文の読み」と「11、物語文の読み」とは、長文の説明文や物語文の主題、要旨を捉えるような読解のドリル問題である。「12、文中の言語事項」は、これらの長文の中の語句の意味や言葉の決まりに関する問題で、広い文脈の中で言葉を扱うという点以外は、(2)言葉(の意味、使い方と決まり)と同種の問題である。これらの問題は、(表6)に見られるように、各社ともかなり多くの頁を割り当て、重要視している、その重要性から考えて、これは教育課程的な妥当性を高めるものと云うことができよう。

以上は、「国語ドリル」の内容を、大きく(1)文字(の読み書き)、(2)言葉(の意味、用法と決まり)、(3)文・文章(の構成と文意理解)という三つの領域に分け、これをさらに下位分類を行って考察してきた。国語の「学習指導要領」の分類視点である(1)言語事項、(2)表現、(3)理解という視点、さらに発音法、表記法、生成文法、変形文法、意味論等の立場からもざっと考察してきた。

それによると、6社の「国語ドリル」は、いずれもこうした視点をふまえて、問題作りに創意工夫を行っていることが分かる。子どもの発達段階をふまえて、よく分かることと興味・関心をそそることとを目指した問題作りの工夫も見られる。

各社とも教育課程的に見た内容の妥当性に配慮していることも十分に伺い知ることができた。各社の図書教材を分析し、分析結果を一覧表にまとめた(表5・1)、(表5・2)および(表6)から、上記のようなことが読み取れる。また、社によって多少扱っている内容の違いや、重点の置きどころに違いがある。これらの表を仔細に眺めると、こうした各社の特色についても読み取ることができよう。